恩師上人を追回して　――伝来の浄土教より光明主義に目覚むるまで――

秋田市　村山吉三郎
元秋田銀行支配人

「青年よ大志あれ」（ボーイズ、ビー、アンビシャス）の校訓に育てられて明治四十年北大を出た私は盛んな熱

望に充ちて処世のスタートを切った。併し社会では学校と違い勤勉努力に対し直に相当の酬ひは来ない。総ては運命だ業報だと諦めはするものゝ、内心の不満と悲嘆にやる瀬ない胸を焦す生活を辿って居た。

大正十二年函館で弁栄聖者に御縁のあられた一青年僧武藤氏から、『宗祖の皮髄』と『人生の帰趣』を頂き、同時に御高弟として関東に笹本上人あることを聞き、其年函館から上京して笹本上人様を慶運寺にお訪ねしたが、御別時に御出掛け中で奥様に御会ひしお役僧に亡父の御回向をして頂いたきりで目的を果さず函館に帰った。

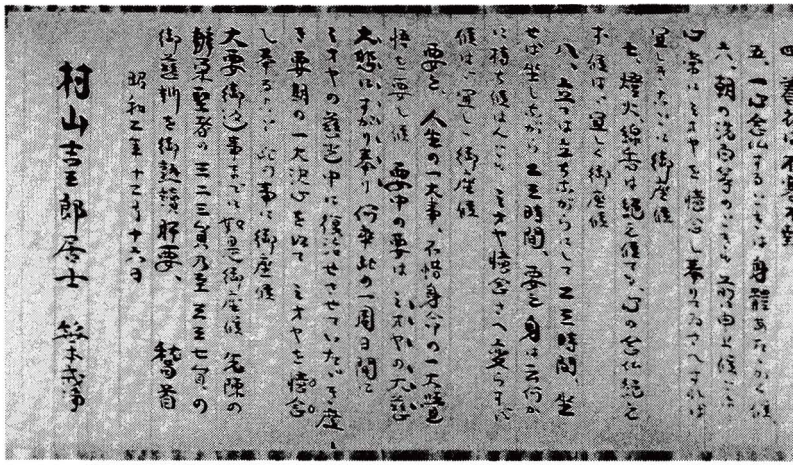
其後昭和元年に東京の本店詰となつた。今生は業報の一生だと思ふ程、念仏者と言はれた亡父の感化で幼時から浄土宗のお念仏を大切にして来た私は、元祖様の一枚起請文通りたゞ一向に念仏するの外ないと信じて、遂に昭和二年の春文字通りの不断念仏相続を発願し、執務の時以外は、全て称名を続けることにし、殊に日曜には朝から外出散歩して夜遅く迄、芝公園、上野等東京市内を廻り歩いて称名相続のよすがにした。一日中宅でも念仏ばかり申して居る私が日曜も夜遅く帰るので、鉄道往生でもしやしないかと妻は一方ならず心配して居たそうだ。

斯ういふ念仏生活が二、三ヶ月続いて居た夏九月の或る日曜日に偶然にも芝増上寺境内に勇ましく鳴り響く木魚の音を辿って祖師堂へ行き、そこに開催の東京光明会の例会を発見した。『人生の帰趣』で見て居た礼拝儀があげられ、武藤氏から聞いてゐた三昧仏様が掛って居る。会員方と御一緒に御念仏させて頂き、導師相馬上人の御法話を聞き、アヽ此の会で私は救はれるのだと思ふた。

其時東京には増上寺の外、芝の済海寺と小石川の一行院とにも日曜例会があり、其処には笹本上人様が導

師せられることも聞き、予ての宿願は愈々達成されることを悦び、其後毎日曜の例会や、有志だけの念仏三昧会にも出て、一心に精進の歩を進めた。

例会での笹本上人様の御話が年来読んで居た聖者の御遺稿そのまゝだと言ふことも段々解って来て、私の不断念仏相続は其後も益々熱意を以て続けたが、其うちに当時共生会の婦人幹部であった妻からそう一日中御念仏許りして居られては、家庭が淋しくて困るとの批難が出るやうになったので、この事を笹本上人様にお質ねした時、済海寺での御答へに「それは未来教の念仏をされるからだ。光明主義は円具教の念仏で、生ける如来様が今現に此処に在しまして一心にお念仏すれば其霊応の御姿に御会ひ出来て、此処が常恒平和の聖きみ国となって今から未来永遠の生命に甦るのだから、歓喜踊躍のお念仏で家庭の人々も楽しく、明かるくなられる」と教へられたが、この世は業報よと諦めて、未来にこそ順次の往生を遂ぐるのだとの教へが幼時から浸み込んで居る私は、右御上



村山吉三郎氏が頂かれた戒浄上人のお手紙（兵庫　村山宏氏蔵）

人様の御答へを聞いた時、勿体ないがそれは聖道門の此土入聖を、未来往生の浄土教に無理にくっ付けた話だと思へてならなかった。

併し其時分の私は未来往生所期のお念仏では現実に世をはかなみ、勇ましく活動する気力も衰ろへ行くのが事実で、妻子をかゝへて居て斯んなことではならぬ矢張り光明主義の円具念仏に依るの外、私の行くべき道は無いと思ひ、桑の木魚も購入して会場や自宅の三昧仏様の前で、たゞもう驀直に念仏に精進し、殊に土曜の午後から日曜の夕方までは不眠不休で念仏することを怠らなかった。

その年の秋東京で初めて笹本上人様御導師の御別時が一週間小石川の大善寺で開かれたので、勤め先は病気と称して欠勤して之に参加した。御上人様の御法話が心に沁みて、七日間たゞもう懺悔の涙で泣き通したのだが段々頂ける霊感で、オヤ様が恋しくてならぬようになった。

往年田中先生が七日間済海寺で不眠不休の念仏三昧を修せられた御芳躅に倣ふて、その年の暮の二十八日から正月三日まで七日間、東京市外の九品寺の観音堂に参籠して七日七夜の不眠不休念仏をせんと発願した。その際の心掛けを手紙で笹本上人様に御質ねした処、有難い御懇切な御垂示を頂くことが出来た。(前掲写真参照)業障の深い私は、この御慈訓に対しても、『煩悩に死して心霊に生く』『生滅永く滅して常住に帰す』の辺が、矢張り聖道門的で変だと思ふた。殊には『不惜身命』の一大覚悟を要すと言ふ御詞が二ヶ所まであるのには全く驚いた。不惜身命と言ふは聖道門の自力難行道でないか。成る程聖者の御遺稿にもそう仰せられてあり、又念仏七覚支の御聖歌にも『身命惜まず念ずれば』とはあるが、そんなことが他力易行道の浄土教念仏に必須の要件かと言ふ点が実は腑に落ちなかった。斯の様にどうも幼時から私に薫習の他力未来往生的の念仏の考えとは総てが食ひ違ふのだ。

さりとて当時私には外に行く道が無かった。又不思議にも、オヤ様に御会ひしたい恋しさの念は益々募る許りだ。我身と心との総てを捧げ奉る念仏に不惜身命は当然だと思ひ直し、勇を鼓して参籠を決行した。

参籠第五日まで種々天眼的の境地を経て、色々神秘な霊感もあったが第六日になると頭が鉄釜を被ったやうな固さを感ずる。死にそうにも感じた。笹本上人様にだまされて気違ひになり、廃人になるのかと勿体ないが、そんなにも思ふた。併し過去四十四年の生涯に何等為すなかりし此身体だ。御念仏の為めに死ぬなら寧ろ本望だと涙を流して奮進を続けた。然るに不思議にも其夜より頭も手足も柔かになり、遂に結願の時迄には念仏三昧の真目的を一応達成させて頂いたと言ふ確たる信念に住して、身も軽々と帰宅するを得た。

顧りみれば自らの力では到底出来ぬと思ふた不惜身命の域も参籠中に事実上通過して居たのだ。厳寒で寺

でも私の宅でも多くは流感に罹って居る時、極端な寒がりやの私が寒い冷い観音堂の参籠から風邪も引かずに元気で帰宅した。之れみな見仏所期の念仏三昧には、最尊第一の威神光明の御力が加被されるからだ。自力と他力、聖道門と浄土門、難行と易行、未来教と円具教、之等に関して当時の私と同じ思ひに悩んで居られる方があられたら、どうぞ之を御参考にして頂きたい。

熟ら〳〵思へば聖者の御遺稿は其当時の四、五年前から有難く読んで居ながら、笹本上人様の御教導を受けるまではすべてを自己流に解釈して、矢張り旧来の心構えで念仏して居た私に、真実の起行の用心を御指示下されたのは全く恩師上人の賜物である。宗教の信仰は実践修行を離れては得られない。聖者の御遺稿が聖者の思召通りに頂ける為には、どうしても、笹本上人様の如き生ける応同の三昧発得の善知識に教導して頂くことが一番の肝要だ。どうぞ今後御上人様と同じ御教導を御与へ下さる御先達方が各地に輩出せられんことを一意念願に堪へない。